



2010/2011シーズン

PLAY 演劇



新国立劇場

2010年1月

| Contents |

演劇芸術参与（次期演劇芸術監督予定者）宮田慶子	2
-------------------------------	---

2010/2011シーズン 演劇 ラインアップ	3
-------------------------------	---

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—]I

ヘッダ・ガーブレル 新訳上演	4
-----------------------------	---

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—]II

やけたトタン屋根の上の猫 新訳上演	8
--------------------------------	---

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—]III

わが町 新訳上演	11
-----------------------	----

焼肉ドラゴン 再演	14
------------------------	----

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—]IV

ゴドーを待ちながら 新訳上演	17
-----------------------------	----

鳥瞰図 —ちょうかんず— 再演	20
------------------------------	----

雨	23
---------	----

おどくみ 新作	26
----------------------	----

公演一覧（1997.10～2010.7）	29
----------------------------	----



演劇芸術参与
(次期演劇芸術監督予定者)
宮田 慶子

未来への財産

2010/2011 シーズンより、演劇芸術監督の任に就かせて頂くにあたり、身の引き締まる思いであります。

広く親しんで頂ける劇場でありたい、そして何より、広く愛される演劇でありたいと願い、その一助となることが務めであると考えています。

さまざまな人生の姿や、物の考え方、表現の多様性に出会い、知的な刺激や感動を実感する喜びが、演劇の魅力です。

その演劇ならではの魅力を最大限に展開していきたいという思いを基に、2010/2011 シーズンのラインアップを組み上げ、その中のシリーズとして「JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—」を企画いたしました。

近代以降、百数十年に及ぶ時の流れの中で、世界の優れた演劇と出会うことで、日本の演劇は進化を続けて来ました。出会いは、時に衝撃と波紋を投げかけ、さまざまな化学反応を引き起こし、日本演劇という一本の木は、時代を映しながら、旺盛な生命力で枝を広げてきました。

大木となった現代の演劇状況の中で、今こそ、未来への確かな財産として、枝をたぐり、太い幹を再検証すると同時に、蓄積の上に立つ現在を提示したいというのが、このシリーズの主旨です。

まず、9月のシーズン幕開けには、日本近代演劇史の扉をあけたとも云える、ノルウェーの国民的作家イプセンの『ヘッダ・ガーブレル』、11月にはアメリカを代表する、テネシー・ウィリアムズの『やけたトタン屋根の上の猫』、1月には抽象化と普遍的なドラマ性を両立させて新しい境地を開いた、ソーントン・ワイルダーの『わが町』、4月には現代演劇の礎ともいえるサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』の四作品を選びました。

どれも、記念碑的な名作ですが、今回、四作品とも、新たな翻訳に取り組みます。新翻訳による上演は、最も待ち望まれていた画期的なプロジェクトであり、このシリーズの主旨と魅力を鮮明に際立たせてくれると信じています。

一方、日本の作品として、6月には、現代劇の巨塔、井上ひさし氏の代表作のひとつである『雨』、そしてシーズン最後の7月には、気鋭の劇作家、青木豪氏の新作書下ろしと、意欲的な舞台が続きます。

又、2月には、2008年に演劇界最大の話題作となった『焼肉ドラゴン』の再演、そして5月には、同じく2008年に好評を博した『鳥瞰図』の再演と全国公演を予定しています。

また、各公演に関連したリーディング、トークショー、シンポジウム、レクチャーなどを毎月開催する「マンスリー・プロジェクト」を立ち上げ、多角的に作品にアプローチする企画を展開していきます。

演劇は常に、芸術性、社会性、時代性、人間性など、多くの要素を抱え込んでいます。それらすべてに貪欲に取り組みながら、過去と未来をつなぐ現在の立ち位置を、確かに刻んでいきたいと思います。

良質な舞台作りと、幅広いプロジェクトを通して、豊かな演劇の魅力を、発信し続けていきたいと願っています。

〈プロフィール〉

1957年生まれ、東京都出身。

80年、劇団青年座（文芸部）に入団。83年青年座スタジオ公演『ひといきといき』の作・演出でデビュー。

翻訳劇、近代古典、ストレートプレイ、ミュージカル、商業演劇、小劇場と多方面にわたる作品を手がける一方、演劇教育や日本各地での演劇振興・交流に積極的に関与している。

新国立劇場演劇研究所講師・サポート委員。社団法人日本劇団協議会常務理事、日本演出者協会副理事長。

2008年9月1日より新国立劇場演劇芸術参与、10年9月新国立劇場演劇芸術監督就任予定。

主な受賞歴に、1994年第29回紀伊國屋演劇賞個人賞（『MOTHER』青年座）、97年第5回読売演劇大賞優秀演出家賞（『フユヒコ』青年座）、98年芸術選奨文部大臣新人賞（新国立劇場公演『ディア・ライアー』）、2001年第43回毎日芸術賞千田是也賞、第9回読売演劇大賞最優秀演出家賞（『赤シャツ』『悔しい女』青年座、『サラ』松竹）など。

上記以外の主な演出作品に、『ブンナよ、木からおいてこい』『妻と社長と九ちゃん』『千里眼の女』（青年座）、『愛は謎の変奏曲』『恋の三重奏』『ガブリエル・シャネル』（松竹）、『ノイズオフ』『エレファントマン』『ベテン師と詐欺師』（ホリプロ）、『ふたたびの恋』『LOVE30』（パルコ）、『伝説の女優』（アトリエ・ダンカン）など。

新国立劇場では上記『ディア・ライアー』のほか、『かくて新年は』『美女で野獣』『屋上庭園』を演出している。

■ 芸術監督任期（予定）：平成22（2010）年9月1日～平成25（2013）年8月31日

2010/2011 シーズン 演劇ラインアップ

〈計 8 演目〉

2010.9-10

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—]I

ヘッダ・ガーブレル

作： ヘンリック・イブセン

翻訳：アンネ・ランデ・ペータス／長島 確

演出：宮田慶子

2010.11

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—]II

やけたトタン屋根の上の猫

作： テネシー・ウィリアムズ

翻訳：常田景子

演出：松本祐子

2011.1

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—]III

わが町

作： ソートン・ワイルダー

翻訳：水谷八也

演出：宮田慶子

2011.2

焼肉ドラゴン

作： 鄭義信

翻訳：川原賢柱

演出：鄭義信

2011.4

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—]IV

ゴドーを待ちながら

作： サミュエル・ベケット

翻訳：岩切正一郎

演出：森新太郎

2011.5

鳥瞰図 —ちょうかんず—

作： 早船 聡

演出：松本祐子

2011.6

雨

作： 井上ひさし

演出：栗山民也

2011.6-7

おどくみ

作： 青木 豪

演出：宮田慶子

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—] I

2010.9 ~ 10

新訳上演

ヘッダ・ガーブレル

Hedda Gabler

小劇場

●前売開始：2010年7月19日（月・祝）

作：ヘンリック・イブセン

翻訳：アンネ・ランデ・ペータス／長島 確

演出：宮田慶子

出演：大地真央／益岡 徹／七瀬なつみ／羽場裕一／山口馬木也／青山眉子／田島令子

企画意図

「JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—」シリーズの一作目は、宮田の中で長い間温めていた作品『ヘッダ・ガーブレル』。イブセン作品の中でも最も現代的と称されるこの作品を、新たにノルウェー語からの新訳に取り組み、芸術監督就任1シーズン目のオープニング作品として満を持して取り上げます。

くしくも、2010年1月にはノルウェーでイブセン戯曲の決定版全集が世界に向けて出版される予定です。秋の上演台本はこの決定版戯曲を再検討し、現代の『ヘッダ・ガーブレル』として甦らせたいと考えています。

『ヘッダ・ガーブレル』は、1890年12月に出版（スカンジナビア全土、フランス、イギリス、アメリカ、ロシア、オランダで同時発売）、翌年1月にミュンヘン・レジデンツ劇場で初演されました。2月にはクリスチャニア・ノルウェー劇場にてノルウェー初演。その後、世界各国で上演されています。

将軍の血をひくヘッダ・ガーブレルの、贅沢で一見自由奔放に見える生き方と、その一方で心の中に抱える不安、不満、言いようのない焦燥感、文化的背景の違いが、夫となるイェルゲン・テスマン、天才肌の文化史学者エイレルト・レーヴボルク、ブラック判事らとのやり取りから窺える作品です。この登場人物たちの生き様、その人間関係の様相は、自己中心的で、逆に閉鎖的になり始めている現代社会に生きるわれわれ現代人に強く響き、問いかける作品です。

●料金 A：6,300円・B：3,150円

PLAY | ヘッダ・ガーブレル

4

作 品

ガーブレル将軍の娘ヘッダは美しく魅力的でプライドが高い。文化史専攻の研究者であるイェルゲン・テスマンは彼女との結婚を強く望み、願いをかなえる。

舞台は、二人が半年におよぶ長い新婚旅行から帰ってきた新居の朝から幕をあける。

同じころ、若いころよりテスマンのライバルであったエイレルト・レーヴボルクが街にやってくる。彼は、ヘッダの古い知り合いであるエルヴステード夫人と共同で論文を執筆していた。テスマンは純粋にレーヴボルクの才能を評価し、ヘッダはふたりの関係に苛立ちをおぼえる。

ある日、レーヴボルクがその論文を落としてしまう。テスマンがそれを拾い、持ち帰ったが、ヘッダはそのことをレーヴボルクに隠し、論文を燃やしてしまう。絶望したレーヴボルクは、ヘッダからピストルを渡され、自殺する。

テスマンとヘッダの友人であるブラック判事は、そのピストルがガーブレル将軍のものであると知り、それをネタにヘッダに言い寄る。

一方、テスマンはエルヴステード夫人と、レーヴボルクが残したメモを頼りに彼の論文を復活できないかと尽力する。家族や友人たちの充実した生き方を目の当たりにしながらヘッダは悲劇的結末を選ぶ。

翻訳家からのメッセージ

アンネ・ランデ・ペータス

新国立劇場の『ヘッダ・ガーブレル』の上演では、在日ノルウェー大使館も劇場もノルウェー語の原本からの新訳であることを強く望んでいました。私の翻訳をドラマトゥルクの長島確さんが再確認し、必要なところは直してもらうことになります。長島さんはノルウェーの現代劇作家ヨン・フォッセと親交があり、以前彼の作品を共訳しています。長島さんとの共同作業は私にとってすばらしい経験の連続であり、とても勉強になりました。

『ヘッダ・ガーブレル』はすでに6回も日本語に訳されているそうです。イプセンの戯曲をノルウェー語から直接翻訳した二人の偉大な翻訳家、毛利三彌先生や亡くなられた原千代海先生による素晴らしい翻訳がすでにあるのに、私が新しく翻訳する意味はどこにあるのでしょうか。コンテンポラリーな、現在使われている言葉を使用してほしいという宮田さんの要望が、私にとっての一番重要な指針となっています。今の日本人がイプセンの言葉にできるだけ共感できるようにするにはどう表現すればいいのかを考えながら訳しています。原先生が一番気にかけていた作品『ヘッダ・ガーブレル』を翻訳する機会に恵まれたことは、日本で言う「なにかの縁」なのではないかと思います。ひょっとして原先生もどこかから見守ってくださっているのではないかしら？

翻訳家からのメッセージ

長島 確

戯曲の翻訳がとてもデリケートな問題をはらんでいることを、いつも感じています。翻訳とはそれ自体ひとつの解釈であり、演出的判断を多分に含んでいるものです。優れた小説の翻訳は、優れた翻訳家の演出的手腕によって成り立っています。しかし戯曲の場合、翻訳者とは別に、演出家がいるわけで、話が複雑になります。翻訳者が事前に下す判断は、演出家や俳優の仕事の可能性を、いちじるしく狭めることにならないのでしょうか。

でも逆に、もし翻訳者が独断でいろいろなことを決めずに、原文のもつさまざまな可能性を演出家や俳優に向けて開き、共有した上で、丁寧な共同作業ができるならば、翻訳から上演のプロセスには、驚くほど豊かな創造の余地があるといえます。

日本の近代劇は翻訳劇とともに始まったといえますが、いまあらためて、演劇における翻訳のあり方を問い直す時期に来ていると思います。今回、イプセンの新訳の機会を与えられ、演出の宮田さんとも解釈や人物造形について十分な意見交換をしながら、共訳者のアンネ・ペータスさんと作業を進めています。奇をてらうのではない、けれど確実に新しい翻訳がお届けできることを願っています。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

『ヘッダ・ガーブレル』は、同じくイプセンの代表作として知られる『人形の家』の11年後に執筆されています。“家庭や結婚からの女性の自立を唱った作品”として、この二作品は同系列に考えられることが多いようですが、11年の時の流れを受けて、実は、その女性観は大きく変容しています。題名でもある『ヘッダ・ガーブレル』は、彼女の旧姓であり、敬愛する、誇り高き軍人であった、父・ガーブレル将軍の名を残しています。そして、ヘッダの自殺という衝撃的な幕切れは、変わりゆく時代そのものに、敢然とNO！を突きつけた、個の尊厳に立った、更なる“新しい女”の生き様でもあります。それはもはや、男女の別を超えた、人間としての、意志や信念であるところに、深い魅力を感じます。「信じる」という言葉さえ不確実になってしまった今、信じるものを守り続けようとしたヘッダのドラマに、真正面から取り組みたいと思います。

ヘッダ・ガーブレル

ヘンリック・イブセン

Henrik Johan Ibsen

ノルウェーの劇作家。1828年生まれ。近代リアリズム演劇を確立したイブセンは現代演劇の父とも言われ、シェイクスピア以後、世界でもっとも盛んに上演されている劇作家とも言われる。50年に第1作目『カティリーナ』を発表。代表作に『ペール・ギュント』『人形の家』『野鴨』『幽霊』『ロスメルスホルム』『海の夫人』『ヘッダ・ガブラー』『小さなエイヨルフ』などがある。生涯26編の戯曲と詩集を1篇残している。1906年没。



アンネ・ランデ・ペータス

Anne Lande Peters

演劇研究家、翻訳家。ノルウェー人。神戸生まれ。宣教師である親とともにノルウェーと日本の間を往来して育つ。翻訳に三島由紀夫『近代能楽集』のノルウェー語版、ヨン・フォッセ『僕は風』の日本語版がある。早稲田大学およびライデン大学にて「落語における女性」の博士論文を執筆中。現在、夫と子供三人とともにベルギー在住。

長島 確

Nagashima Kaku

ドラマトウルク、翻訳家。立教大学フランス文学科卒。ピーター・ブルック作品の字幕操作を機に、戯曲の翻訳に取り組み始める。現在、日本でまだ数少ないドラマトウルクとして、コンセプトの立案から上演テキストの編集・構成まで、身体や声とともにあることばを幅広く扱う。ベケットやサラ・ケイン、ヨン・フォッセらの戯曲の翻訳のほか、さまざまな演出家や劇団の作品に参加。参加作品に『アトミック・サバイバー』（阿部初美演出）、『死のバリエーション』（A・コーベ演出）、『44 マクベス』（中野成樹演出）、『4.48 サイコシス』（鈴屋法水演出）ほか多数。訳書にベケット『いざ最悪の方へ』。2008年、阿部初美らと創作レーベル「ミクストメディア・プロダクト」を始動。東京藝術大学、立教大学、京都造形芸術大学非常勤講師。



宮田慶子

Miyata Keiko

※ P2 を参照

[JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—] II

2010.11

新訳上演

やけたトタン屋根の上の猫

Cat on a Hot Tin Roof

小劇場

●前売開始：2010年9月12日（日）

作： テネシー・ウィリアムズ

翻訳：常田景子

演出：松本祐子

出演：寺島しのぶ／北村有起哉／広岡由里子／銀粉蝶／木場勝己／市川 勇／三上市朗（台本順）ほか

企画意図

「JAPAN MEETS…」シリーズ二作目は、アメリカの劇作家、テネシー・ウィリアムズの『ガラスの動物園』、『欲望という名の電車』と並ぶ傑作戯曲であり、1955年のピューリッツァー賞を受賞した作品『やけたトタン屋根の上の猫』が登場。

エリヤ・カザン演出によるブロードウェイでの大成功に続き、58年には、エリザベス・テラー、ポール・ニューマンの主演により映画化され、ウィリアムズ自身が自分の戯曲作品の中で一番のお気に入りと言っているこの名作には、作者自身の姿と意思が他作品以上に色濃く映しだされています。

ウィリアムズは「人から人へ」と題した、戯曲の巻頭文の最後にこう書き記しています。「それはともかく！—この私はあなたがたに語り続けたい、私たちがなんのために生き、また、死ぬのか、かくしへだてなく存分に語りたい、まるで私があなたがたの知りあいのだれよりも親しい友であるかのように。」と。

人間と人間のぶつかり合いからでしか生まれる事がかなわない真実の姿に、寺島しのぶ、北村有起哉、木場勝己をはじめとした実力派キャストが挑みます。

作 品

舞台はアメリカ南部の大富豪の家。一代で大農場を築き上げた一家の主（ビッグ・ダディ）は、体調を崩して受けた健康診断の結果、癌に侵され余命いくばくもないと判明するが、本人には健康体と知らされていた。この家の次男ブリックは、愛する友人の死をきっかけに酒びたりの生活を送り、その妻マギーは、ある事件を境に失いかけている夫の愛を取り戻そうと必死だった。また、長男グーパーとその妻メイの夫妻は、父の病状を知って、遺産相続を有利に運ぼうとしていた。

ビッグ・ダディの誕生日パーティーに集まった二組の夫婦、母親ら、一見なごやかな家族の団欒の中から、親子、兄弟、夫婦そして家族たちの「嘘と真実」が白日のもとに曝されて行く……。

●料金 A：5,250円・B：3,150円

PLAY | やけたトタン屋根の上の猫

8

翻訳家からのメッセージ

常田景子

テネシー・ウィリアムズは、日本で最も人気のある海外劇作家の一人ではないでしょうか。そのウィリアムズの作品の中でも、『やけたトタン屋根の上の猫』は、『欲望という名の電車』『ガラスの動物園』について、最もよく翻訳上演されている作品だと思われます。当然すでに複数の名訳があるので、今回、新国立劇場から翻訳を依頼された時は、正直に言って少し驚きました。それだけに、身の引きしまる思いがします。テネシー・ウィリアムズが、自分の書いた戯曲の中で一番好きな作品だと語ったというのなるほどと思われる、多面的で濃密なドラマです。1955年に発表された、アメリカ南部の大農園を舞台とする芝居ですが、描かれている夫婦、家族の葛藤は、生と死をめぐる普遍的な深さと重みを持って私たちに迫ってきます。

演出家からのメッセージ

松本祐子

—『やけたトタン屋根の上の猫』に寄せて

もしもテネシー・ウィリアムズが、バーチャルなコミュニケーションが全盛の今の時代に降り立ったら、どうなってしまうだろうか？ 発狂する？ アルコールに逃げる？ 誰かと繋がりたいくて、街角で大声で詩を叫ぶ？ それとも、新しい傑作を書きあげる？

どうして、こんなことを考えてしまうかという、彼ほど他者と“本当の意味で語り合いたい”という欲望を強く持っている劇作家はいないと思うからである。そしてその欲望とともに、そもそも真実のコミュニケーションなんて不可能なのかもしれないという絶望を抱えて苦しんでいるのがテネシー・ウィリアムズだからだ。彼のごく初期の作品『Not About Nightingales』の中にも、『地獄のオルフェ』の中にも、そしてこの『やけたトタン屋根の上の猫』の作者自身の序文の中にも、繰り返し繰り返し出てくる彼が考えるところの人間のコミュニケーションのありようは「生涯を独房に監禁された囚人が、同じ境遇の囚人に向かって自己の監房から呼びかける悲鳴」であり、彼の願望は「あなたに向かって語り続けたい。私たちは何のために生き、そして死ぬのかを腹藏なくうちとけて語り続けたい。」というものである。真実であるという確信は、あまりにも脆いもので、ほとんどの会話は嘘の上に成り立っているわけなのだが、そんな“なまぬるい”コミュニケーションではなく、もっと剥き出しのひりひりとした、相手を切りあって血を浴びることで初めて実感できる厳しい対話を求める彼の言葉は、相手を傷つけること、相手から傷つけられることにひどく臆病な今の日本の社会には、疫病神のような、奇跡のような何かとして光ることだろう。「人間の経験の真実の姿をとらえる器としての演劇」を求めて、己の傷をさらけ出して言葉を紡いだテネシー・ウィリアムズの作品と対峙することは、私にとって自分の化けの皮を一度剥がしてひっくり返して、裏と表がぐちゃぐちゃになるまで言葉と格闘することなんだと覚悟している。

やけたトタン屋根の上の猫

テネシー・ウィリアムズ

Tennessee Williams

テネシー・ウィリアムズ（1911年3月26日－1983年2月25日）は、アメリカ合衆国のミシシッピ州コロンバス生まれの劇作家。本名はトマス・ラニアー・ウィリアムズ（Thomas Lanier Williams）。愛称の「テネシー」はその南部訛りからセントルイスでの学友に付けられた。不況時代のセントルイスで不幸な家庭環境のもと青春時代を送る。各地を放浪、大学、職をかえながら、創作していたが、1944年『ガラスの動物園』がブロードウェイで大成功し、47年の『欲望という名の電車』、55年の『やけたトタン屋根の上の猫』で2度ピュリッツァー賞を受賞。その名声の裏で、生涯負いつづけた孤独との葛藤から私生活は荒れていた。83年、ニューヨークのホテルの一室で事故死。



常田景子

Tsuneda Keiko

神奈川県生まれ。横浜、富山、神戸、大阪、東京で育つ。東京大学文学部心理学科卒。大学在学中、劇団夢の遊眠社に入団。文学座附属演劇研究所20期。木山事務所、如月小春主宰NOISEなどで俳優として活動するかたわら翻訳を始め、バルコ劇場制作部勤務を経て、現在は上演台本を中心に翻訳に携わる。初上演作品は1993年、宮本亜門演出バルコ劇場公演『滅びかけた人類、その愛の本質とは…』。2001年、第8回湯浅芳子賞、翻訳・脚色部門受賞。近年の主な上演作品に、『グレイ・ガーデンズ』『奇跡の人』『サンデー・イン・ザ・パーク・ウィズ・ジョージ』『回転木馬』『シカゴ』『6週間のダンスレッスン』『ペテン師と詐欺師』『ピアフ』『ミザリー』『ディスタンス・フロム・ヒア』『伝説の女優』『ヴァギナ・モノローグ』『スタッフ・ハブズ』『サムワン』『パーマネント・ウェイ』『ア・ナンバー』『ウィンズロウ・ボーイ』『デモクラシー』『ママが私に言ったこと』『ダム・ウェイター』など。翻訳書に、『美しさという神話』『路上の砂塵』『グードウの神々』『ダ・ヴィンチとマキアヴェッリ』『戯曲の読み方』『現代戯曲の設計』『リディキュラス!』などがある。

松本祐子

Matsumoto Yuko

1992年、文学座附属演劇研究所に入所、97年より文学座座員に。99年11月より文化庁派遣芸術家在外研修員として1年間、ロンドンにて研修。文学座のみならず数々の作品の演出を手がける。主な演出作品に『冬のひまわり』『秋の螢』『音の世界』『女人渴望』『ホームバディ／カプセル』『ぬけがら』『犀』など文学座公演のほか、流山児プロデュース『ガラスの動物園』、海のサーカス『アジアンスイーツ』、コマプロダクション『ミザリー』、ホリプロ『ピーターパン』『サムワン』『ウーマン・イン・ホワイト』など。2001年『ペンテコスト』上演に対し、湯浅芳子賞を受賞のほか、05年『ぬけがら』『ピーターパン』の演出に対し、第47回毎日芸術賞・千田是也賞を受賞。新国立劇場では04年に『てのひらのこびと』、08年に『鳥瞰図』を演出している。現在、桜美林大学総合文化学科にて非常勤講師を勤めている。



わが町

Our Town

中劇場

●前売開始：2010年10月16日（土）

作： ソートン・ワイルダー

翻 訳：水谷八也

演 出：宮田慶子

音楽／ピアノ演奏：稲本 響

出 演：小堺一機／相島一之／斉藤由貴／鷺尾真知子／中村倫也／佐藤正宏／山本 亨（台本順）ほか

企画意図

「JAPAN MEETS…」シリーズ三作目として上演されるのは、アメリカの劇作家、ソートン・ワイルダーの名作中の名作『わが町』。1938年に発表され、その年のピューリッツァー賞を受賞、その後も全世界で上演され続けており、2009年現在、ニューヨークでもロングラン公演が行われています。

あえて舞台装置をもうけず、ほぼ何もない舞台の上で役者と観客の相互の想像力ですべてを進行してゆく様式は、現代劇の原点ともなった作品であり、その後の現代劇の描かれ方に多大な影響を及ぼしている作品です。

物語を進行する舞台監督役に、そのエンターテインメント性の素養がもっとも適任である小堺一機、又、音楽に、新進気鋭のピアニスト稲本響氏を迎え、愛用の伝説的名器スタインウェイと共に、生演奏のピアノ一台で、劇空間を作り上げてゆきます。また、斉藤由貴、相島一之、鷺尾真知子、佐藤正宏ら、素晴らしいキャストが集結、物語の中心を担う二つの家族を作り出します。2011年新春、必見の舞台です。

作 品

アメリカ合衆国ニューハンプシャー州グローヴァーズ・コーナース。

1901年5月。

この町の医者であるドクター・ギブスの家にも、また隣家の住人、町の新聞の発行人・ウェブ氏の家にも、いつもと変わらない平和な一日が訪れている。ギブスの息子・ジョージとウェブの娘・エミリーは、ともに16歳で幼なじみ。二人の頭にあるのは今日の宿題のこと、将来の夢のこと、そして、ほんの少しだけ気になっている隣の家の幼なじみのこと。いつもの朝、いつもの一日。

1904年7月。高校の卒業式の直後。

今日はエミリーとジョージの結婚式。ジョージは嬉しさのあまり、朝から落ち着かない。新たな家族を迎える2組の両親の、「結婚」に対する思い、新たな家族となる若い二人への願いが語られる。

お互いの愛を再認識した二人は、町の多くの人々の祝福を存分に受けながら、幸せな結婚式を終える。

1913年 夏。

のどかだった町にも少しずつ時代の変化が現われている。馬の代わりに走るようになった自動車。かけられるようになった家の鍵。世の中は確かに変化している。

丘の上の墓地でエミリーの葬式が執り行われている。ジョージと幸せな結婚生活を送っていたエミリーだったが、産後の肥立ちが悪く、命を落としてしまったのだ。悲しみに暮れるジョージ、そしてギブス家、ウェブ家の人々。そんな彼らを、今はこの世のものではなくなった墓地の住人たちが見守っている。

自分の葬式を見つめ、同じ立場となった「死者」たちに仲間入りをするエミリー。過去の幸せな日々を思い出しながら、自分にとって、家族にとって、人間にとって、世界にとって、いったい何が一番大切なのか、ということに気づいていく。

●料金 S：7,350円・A：5,250円・B：3,150円

翻訳家からのメッセージ

水谷八也

ソーントン・ワイルダーの Our Town は、劇団の研究生や大学・高校の ESS の発表会などで好んで上演されてきた戯曲であり、日本でも比較的なじみのある、わかりやすい名作というイメージが強い。しかしそのわかりやすさが曲者だ。「オスカーはワイルド（乱暴）だ。しかし、ソーントンはワイルダー（もっと乱暴）だ」という冗談があるが、このワイルダー、なかなか一筋縄ではいかない。劇作術においてはかなりのワイルダー振りを見せてくれる。1938 年の作だが、その技法は 21 世紀の今でも、いや、今だからこそなお刺激的である。まずは「生」のままの Our Town を堪能してみたい。そして「死者の眼」で自分と世界を、今一度、見つめてみよう。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

ありふれた日常の、親子関係、子供の成長、同じ町に暮らす人々の姿を率直に描き、けれど決して表層的でなく、それを、生と死、宇宙の中の地球という視点にまで俯瞰して見せ、普遍性が本来持つダイナミズムを、これほどまでに明快に提示した作品は、他にはありません。日本では、俳優養成機関などで取り上げられることも多く、また翻案化された舞台も数多く存在しますが、是非とも一度、原作にストレートに向かい合ってみなかった作品です。具体的なものを極力排したシンプルな舞台は、透明な、そしてときには力強いピアノの音色で満たされ、心の奥底と共鳴していきます。戯曲の持つスケール感を大切にしつつ、人の手による暖かさや手ごわりを感じられる舞台作りにしたいと思っています。

わが町

ソーントン・ワイルダー

Thornton Niven Wilder

アメリカを代表する劇作家・小説家。1897年生。イエール大学を卒業後、プリンストン大学大学院にてフランス文学修士課程修了。1927年に小説『サン・ルイス・レイの橋』でピューリッツァー賞を受賞し、一躍脚光を浴びる。戯曲では『水面を動かした天使』(1928)、一幕劇集『長いクリスマス・ディナー』(1931)、『わが町』(1938)、『危機一髪』(1942)、『結婚仲介人』(1954)など。『わが町』、『危機一髪』もそれぞれピューリッツァー賞を受賞している。75年12月7日没。



水谷八也

Mizutani Hachiya

1953年生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科修了。現在、早稲田大学文化構想学部教授。翻訳書にワイルダーの『危機一髪』『結婚仲介人』、アリエル・ドーフマンの『谷間の女たち』『The Other Side/線のむこう側』『世界で最も乾いた土地』など。ワイルダー関係の論文に「Our Town—human mind と human nature のドラマ」「The Skin of Our Teeth における中断」「劇作家ソーントン・ワイルダー —形式としてのヴォードヴィル」「The Matchmaker —生の演劇」「“PRETENSE” の弁護 —ソーントン・ワイルダーの一幕劇集」「Thornton Wilder と Nascuntur Poetae…における詩人の肖像」「Thornton Wilder の The Wreck on the Five-Twenty-Five」などがある。

宮田慶子

Miyata Keiko

※ P2 参照

焼肉ドラゴン

2011.2

再 演

小劇場

●前売開始：2010 年 12 月 12 日（日）

作・演出：鄭義信

翻 訳：川原賢柱

出 演：千葉哲也／栗田 麗／占部房子／若松 力／朴 勝哲／山田貴之／水野あや／
朱 源実／笑福亭銀瓶／申 哲振／朴 帥泳／金 文植／高 秀喜／朱 仁英

企画意図

2002 年東京・ソウル、05 年東京・全国・ソウルと上演された『その河をこえて、五月』に続き、08 年に開場 20 周年を迎えたソウル・芸術の殿堂との再コラボレーション作品として、『焼肉ドラゴン』は東京・ソウルで上演され、両国で毎回スタンディング・オベーションとなる熱狂的な反応で幕を閉じました。その年の演劇賞を総なめにした話題作を、11 年満を持して再演します。

『焼肉ドラゴン』受賞記録

（日本国内）

第 43 回紀伊國屋演劇賞 個人賞（鄭義信）

第 8 回朝日舞台芸術賞 グランプリ（『焼肉ドラゴン』）

第 12 回鶴屋南北戯曲賞（鄭義信『焼肉ドラゴン』）

第 16 回読売演劇大賞 大賞・最優秀作品賞（『焼肉ドラゴン』）

同 優秀男優賞（申哲振『焼肉ドラゴン』）

同 優秀女優賞（高秀喜『焼肉ドラゴン』）

同 優秀演出家賞（梁正雄・鄭義信『焼肉ドラゴン』）

第 59 回芸術選奨 文部科学大臣賞（鄭義信『焼肉ドラゴン』）

（韓国国内）

韓国演劇評論家協会の選ぶ 2008 年 今年の演劇ベスト3

韓国演劇協会が選ぶ 今年の演劇ベスト7

『焼肉ドラゴン』は、日本の焼肉屋を舞台に、ある在日コリアンの家族を通して、日韓の現在、過去、未来を、音楽入り芝居でおかしく、そして哀しく切なく描きました。鄭義信は初演時に、「小さな焼肉屋のおおきな歴史を描きたい」と言いました。まさに空港近くの土地に身を寄せ合って住む人たちのおおきな歴史は、きっとあの時代、あらゆる場所で起きていた普遍的な物語でもあります。

今回も初演と同じく、日韓両国の俳優・落語家・ミュージシャンのビビン（韓国語で混ぜるの意味）キャストで、焼肉屋「焼肉ドラゴン」は賑やかになることでしょう。

●料金 A：5,250 円・B：3,150 円

作 品

万国博覧会が催された 1970 (昭和 45) 年、関西地方都市。高度経済成長に浮かれる時代の片隅で、焼肉屋「焼肉ドラゴン」の赤提灯が今夜も灯る。

店主・金龍吉は、太平洋戦争で左腕を失ったが、それを苦にするふうでもなく、流れていく水のように、いつも自分の人生を淡々と受けとめてきた。

家族は、先妻との間にもうけた二人の娘と、後妻・英順とその連れ子、そして、英順との間にやっと授かった一人息子……ちょっとちぐはぐな家族と、滑稽な客たちで、今夜も「焼肉ドラゴン」は賑々しい。ささいなことで泣いたり、いがみあったり、笑いあったり……。

そんななか、「焼肉ドラゴン」にも、しだいに時代の波が押し寄せてきて……。

これは時代に翻弄されながらも、必死で生きる普遍的な家族の物語です。



2008年公演より

作・演出家からのメッセージ

鄭義信

『焼肉ドラゴン』の初演はお蔭様で日韓ともに暖かい拍手でもって、幕をおろすことができました。また思いもよらぬ多くの賞をいただいて、それを『焼肉ドラゴン』に関った日韓のスタッフ、キャスト、関係者とともに喜びを分かち合えたことは、幸福このうえないことでした。

これほどの反響が湧きあがったことに僕自身も驚きましたが、その再演ともなりますと、同じようにまた受け入れてくれるかどうか、前作以上の日韓の熱いタグを見せることができるかどうか……等々、不安は大いに募ります。

けれど、同時に、「焼肉ドラゴン」のあの家族たち、あの街に住む人たちに、ふたたび出会えることができる喜びにあふれております。

あの登場人物たちが舞台の上で再び輝き始める瞬間を、僕は観客の皆様とともに見つめていきたいと思っています。

焼肉ドラゴン

鄭義信

Chong Wishing

1993年に『ザ・寺山』で第38回岸田國士戯曲賞を受賞。その一方、映画に進出して、同年『月はどっちに出ている』の脚本で、毎日映画コンクール脚本賞、キネマ旬報脚本賞などを受賞。98年には、『愛を乞うひと』でキネマ旬報脚本賞、日本アカデミー賞最優秀脚本賞、第一回菊島隆三賞、アジア太平洋映画祭最優秀脚本賞など数々の賞を受賞した。さらに平成13年度芸術祭賞大賞受賞を受賞した『僕はあした十八になる』(2001/NHK)などテレビ・ラジオのシナリオでも活躍する一方、エッセイ集『アンドレアスの帽子』なども出版。

現在も、文学座、こんにゃく座ほかに戯曲を提供する傍ら、自身も作・演出を努めるユニット〈海のサーカス〉に参加している。2007年10月には新国立劇場『たとえば野に咲く花のように ―アンドロマケ―』の脚本を手がけた。そして08年の新国立劇場『焼肉ドラゴン』では、第16回読売演劇大賞優秀演出家賞、第12回鶴屋南北戯曲賞、第43回紀伊國屋演劇賞、第59回芸術選奨文部科学大臣賞をそれぞれ受賞。10年は初めて翻訳劇に取り組む、あうるすぽっと『Duet For One』がある。



ゴドーを待ちながら

Waiting for Godot

小劇場

作： サミュエル・ベケット

翻 訳：岩切正一郎

演 出：森新太郎

出 演：橋爪 功／石倉三郎 ほか

企画意図

「JAPAN MEETS…」シリーズの最後は、世界演劇の流れを変えた記念碑的作品の登場です。

この作品は 1953 年にパリで初演され、当初は悪評で迎えられましたが、その後「不条理演劇」の代表作として演劇史に名前を残し、現代演劇の礎として今もなお世界各地で上演されています。我が国でも 65 年に初演され、以来さまざまな上演を重ね、また別役実をはじめ多くの劇作家たちに多大な影響を与えました。

今回の上演では、ともに新国立劇場初登場となる橋爪功、石倉三郎の二人を迎え、丁々発止のやりとりと、新鮮な顔合わせによる刺激的な舞台が期待されます。

作 品

田舎道、一本の木がある。

夕方。

エストラゴンが道端に座っている。靴を脱ごうとするのだが、なかなか脱げない。そこへヴラジミールがやってきて他愛のない会話が始まる。やがて、エストラゴンが立ち去ろうとするのをヴラジミールが留める。

エストラゴン どうして。

ヴラジミール ゴドーを待ってる。

エストラゴン そうだね。

二人はゴドーに会ったことはなく、いつまでも待ち続ける。そこにポッツとラッキーがやってくる。やがてラッキーは哲学的な演説を始める。

二人が去った後、少年が現れゴドーの伝言を伝える。今夜は来られないが、明日は必ず来ると。

そして翌日、同じ時刻、同じ場所。

エストラゴンとヴラジミールはまたゴドーを待ち続ける。

世界演劇史に燦然と輝く傑作。満を持して登場です。

翻訳家からのメッセージ

岩切正一郎

人から気晴らしを取りあげると、人はじぶんの運命をみつめ考えはじめ、そして人は不幸になる、とパスカルは言っている。それを逃れるために人は気晴らしをするのだ、と。『ゴドーを待ちながら』のヴラジミールとエストラゴンは、待つあいだの、その気晴らしのようなおしゃべりと演技によって、奇妙にもじぶんの運命をみつめ考えている。滑稽と痛みのからみあい。

その意味で、わたしたちの日常は、おもいのほか『ゴドー』に近い。気晴らしをしながら（パスカルにいわせれば、仕事も戦争も気晴らしなのだ）、じぶんを見つめている。もっとも、舞台のうえではそれがいちだんと簡素に〈現実〉の度合いをましている。どうにもならない、どうにもならない、と言いながら、あの手この手で繰り出される本気が遊びかよくわからないことばと動き。そこから、ときに、哀切きわまる本音のようなもの、ぼろりとこぼれおちて……

『ゴドー』の舞台は、わたしたちひとりひとりが、自分の人生からくみだす無尽蔵のものを感ずる場所なのだと思う。

演出家からのメッセージ

森新太郎

すでに、さまざまな議論や解釈的となってきた『ゴドー待ち』。この作品が提起している問題や意味の大きさを前に、私はあらためて茫然とせざるを得ない。が、茫然とばかりしてられるはずもなく——。ご存知のように、ゴドーはやって来ない。昨日も今日も、そしておそらく明日もやって来ない。それなのに、えんえんえんえんと待ち続ける2人組・ディディとゴゴ。どれだけの体力？ 今回、私が一番こだわりたいのはそこだ。とにかくタフ。すっごいタフ。無意味なまでにタフ。ただ、もう、どうしようもなくタフ。この「どうしようもなく」というところに、圧倒的な喜劇があり、悲劇があるのでないだろうか。

そんなわけで、橋爪功さんと石倉三郎さんのキャスティングを熱望した次第である。奇跡的にもその願いは叶った。加えて、岩切正一郎さんによる抜群にリズムのよい新訳も得た。タフでハードな男たちが繰り広げる、愉快的『ゴドー待ち』になると確信している。

ゴドーを待ちながら

サミュエル・ベケット

Samuel Beckett

サミュエル・ベケット（1906年4月13日 - 1989年12月22日）は、アイルランド生まれの劇作家、小説家、詩人。不条理演劇を代表する作家の一人であり、小説においても20世紀の重要作家の一人とされる。ウジェーヌ・イヨネスコと同様に、20世紀フランスを代表する劇作家としても知られている。1969年にはノーベル文学賞を受賞している。



岩切正一郎

Iwakiri Shoichiro

宮崎県出身。フランス文学者、詩人。現在、国際基督教大学教授。
戯曲の翻訳に『ひばり』（ジャン・アヌイ）、『カリギュラ』（アルベール・カミュ）、音楽劇の翻訳に『兵士の物語』（ラミュ／ストラヴィンスキー）がある。
その他の著作では、著書『さなぎとイマーゴ・ボードレールの詩学』、詩集『エストラゴンの靴』、翻訳書『ノアノア』（ポール・ゴーギャン）、『世界文学空間 文学資本と文学革命』（パスカル・カザノヴァ）、『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』（ルネ・ジラルール）など。
2008年、『ひばり』と『カリギュラ』の翻訳によって、優れた戯曲翻訳に贈られる湯浅芳子賞を受賞。

森新太郎

Mori Shintaro

東京都出身。演出家。演劇集団円、会員。
これまでに演出した主な舞台に、デア・ローアー作『最後の炎』（新国立劇場リーディング公演）、遠藤周作没後十年行事・朗読劇『沈黙』（主演、橋爪功）があり、円では『ロンサム・ウェスト』『天使都市』（仲谷昇、岸田今日子追悼公演）『田中さんの青空』『孤独から一番遠い場所』『コネマラの骸骨』を演出。自身が主宰するモナカ興業でも活動中。
2009年、毎日芸術賞第11回千田是也賞受賞。



2011.5

再 演

鳥瞰図 —ちょうかんず—

小劇場

作： 早船 聡

演出：松本祐子

出演：渡辺美佐子／入江雅人／野村佑香／八十田勇一／弘中麻紀／浅野雅博／佐藤銀平／品川 徹

企画意図

2008年6月～7月に小劇場3作品連続上演を行った、新国立劇場初登場の若手劇作家とベテラン演出家によるコラボレーション企画「シリーズ・同時代」の中から、渡辺美佐子の主演により好評を博した『鳥瞰図—ちょうかんず—』作：早船聡、演出：松本祐子』を再演。

東京公演後には全国公演も予定しています。

作 品

東京湾岸のある町。そこは4分の3が埋め立てた土地で出来ている。かつて住民の多くは海から生活の糧を得ていたが、工業化による汚染と経済成長の中で海に生きる選択肢を捨てた。古い側の土地にある釣り船宿「升本」は3代続く老舗だが、今は地元の常連客相手に細々と営業している。

女将の佐和子と息子の茂雄が切り盛りするこの船宿には近所に住む個性的な面々が集まり、いつも賑やかだ。そんな夏のある日、見知らぬ少女が船宿を訪れた。ミオと名乗るその少女は出て行った長女の娘だと言う。女将にとって初めて見る孫の顔。その来訪をきっかけに失われた海の記憶が語られはじめる……。



2008年公演より

作家からのメッセージ

早船 聡

—再演にあたって

この作品を書くにあたり、私は何度となく千葉県の浦安や行徳を訪れました。『鳥瞰図』は東京湾の奥のある町が舞台なのです。町を歩き、色々な人に声をかけ、昔の様子などを取材しました。「あの向こうは海だったよ」と元漁師の方が教えてくれました。その方は資料館で子供達に昔の漁や海について話すボランティアをしているとのことでした。照れたように、嬉しそうに、自慢げに、そして寂しそうに、昔のことを話してくれました。その老人の指差した先を見ると新しい家々やマンションが並び、人々の暮らしがありました。私はこの町を空から眺めてみたいと思いました。

時間と共に眺めは変化していきます。少しずつ、あるいは大胆に。3年経過した鳥瞰図を再び眺めることができるなんてとても楽しみです。

演出家からのメッセージ

松本祐子

—『鳥瞰図』再演に寄せて

シリーズ同時代というタイトルを与えられて、この企画はスタートしました。同じ時代を生きる、世代の離れた作家と演出家の出会いを目論まれた企画でしたが、作家の早船氏と私はほぼ同世代で、なんだか面映ゆい気がしたのを覚えています。深夜を越えて朝方まで及んだたくさんの打ち合わせと、渡辺美佐子さんをはじめ様々な世代の魅力的な俳優たちとの共同作業を経て、2008年の6月にこの作品は産声を上げました。

初演のパンフレットにも書きましたが、当時すでに、この日本という国では格差社会とかワーキングプアという閉塞的な社会状況を嘆く言葉が溢れていました。そして、しばらくすると世界的な金融危機が起こり、日本だけでなく、もう世界全体が貧しいような息苦しいほどの閉塞感が街を覆いました。こんな時代に、小さな家族の小さいけど大きい物語を語ることはナイーブかもしれません。例えば、この『鳥瞰図』の世界で生きる人々は、せちがらい社会の片隅で、たくさんの失ってしまった何かを抱えて、ごくごく当たり前に生きています。もちろんどんな人も、社会のありようと無関係ではいられなのですが、社会全体よりも個人の小さな悩み事が人を苦しめたり喜ばせたりするものです。失ってしまった何かを取り戻すということはどういう事なのか、何かを許すということは何なのかという事を描くことで、小さな関係性の修復が、社会全体の関係性の修復性と繋いでいく姿を描きたいと考えています。

個人的な幸せと社会の幸せを、鳥が飛びながら風を感じながら俯瞰して見るように、または、虫が地を這いながらその地面の匂いを感じながら見るように、今の日本の同時代を見たいと考えています。

鳥瞰図

早船 聡

Hayafune Satoshi

2002 年、円演劇研究所修了。05 年、劇団サスペンデッツを旗揚げ、これまでの全作品の作・演出を手がける。08 年、新国立劇場シリーズ・同時代に『鳥瞰図』を脚本提供。09 年、シアタートラムネクストジェネレーションvol1、続いて三鷹市芸術文化センターネクストセレクション10th に参加。文字通り新進の劇作家である。また俳優としても多方面で活動、新国立劇場では『マッチ売りの少女』、『世阿弥』、『マテリアル・ママ』に出演のほか、岩松了作・演出『傘とサンダル』『アイスクリームマン』に出演している。



松本 祐子

Matsumoto Yuko

※ P10 を参照

雨

中劇場

作：井上ひさし

演出：栗山民也

出演：市川亀治郎・永作博美／梅沢昌代・たかお鷹・山本龍二・石田圭祐・酒向芳・山西 惇・植本 潤 ほか

企画意図

2010/2011 シーズン後半は、「JAPAN MEETS…」から続く日本の演劇として、現代演劇を語る上で避けては通れない巨頭、井上ひさしの傑作『雨』を上演します。

井上ひさしがおよそ 35 年前、日本から遠く離れたオーストラリア滞在中に一気に書き上げた『雨』。五月舎からこまつ座へと受け継がれた本作は、26 年間に渡り 8 演、計 482 ステージ、そのすべてを木村光一演出により上演を重ねてきた名作中の名作です。その傑作が装いも新たに登場、新国立劇場で、こまつ座で、数々の井上戯曲を時に細やかに時に大胆に演出し、作家とともに名舞台を生み続けてきた栗山民也が、井上ひさし氏から直々の指名を受け、新演出に挑みます。

他人になりすまし大金を手に入れようとする主人公・徳と、彼を取り巻く人々、そして運命の女・おたかとの日々。井上ひさしが紡ぎ出す美しい日本語の数々。しかしその向こう側に見えるのは、ただひたすらに生きる人々の苦しみ、哀しみ、そして喜び。

徳役には歌舞伎のみならず現代演劇での活躍も目覚ましい市川亀治郎、おたか役にはテレビ・映画・舞台などさまざまな作品で鮮烈な印象を残す永作博美を迎え、そのほか梅沢昌代、たかお鷹、山本龍二ら、今や舞台では欠かすことのできない実力派俳優が集結します。

作 品

江戸の町、両国橋。古釘やら煙管の雁首などを拾って歩く金物拾いの徳は、ある豪雨の午後、雨宿りに入った橋の下で、新顔の老いた浮浪者から「喜左衛門さまでは……？」と声をかけられた。そんな名前は知らぬと無視を決め込む徳に、勝手に話しかけては勝手に懐かしがるこの老人。

喜左衛門とは、平昌一の器量よし、「紅屋」の娘おたかのもとへ二年前に婿入りした男なのだが、その喜左衛門と自分がまるで生き写し、しかもその男、去年の秋から行方不明になっている。平昌とは紅花で台所を保っている北国の小藩で、「紅屋」とはその平昌で一番の大店のこと。

そりゃ人違いだ、俺はこの橋の下に赤ん坊の時分に捨てられて、物心ついた時にはもう屑拾いだった、と老人に取り合おうとはしない徳だったが、話を聞くうち、徳の脳裏に一つの思案が浮かぶ。

「どうにかしておたかという女を一目見ることはできねえか」

北へ北へと咲きのぼって行く桜の花を追ううちに、とうとう奥州平昌までやって来た徳。しかし、たとえ姿かたちが生き写しの瓜ふたつでも、徳は喜左衛門の事をなにとつ知らない。その上、江戸から宇都宮、宇都宮から白河、白河から福島、米沢、平昌と北上するうち、言葉（方言）の様子が変わってきたことに戸惑いを隠せない徳。こんな方言では話せない、これでは他人になりすますことなど出来やしない、やっぱり明日の朝には江戸に戻ろう、と諦めかけた丁度その時、徳は村人に見つけられる。

「紅屋の旦那様（さ）ア……」「喜左衛門様（さ）ア！」

その声を聞き、徳はいまやはっきりと紅屋喜左衛門を演じようと決意し、記憶を失ったふりをしてゆっくりと村人の輪に入っていく……。

演出家からのメッセージ

栗山民也

井上ひさしさんの戯曲を演出するということは、深く多層的な人間の歴史に、しっかりと正面から向き合うような体験なのです。

すでに舞台で何度か観ていたはずのこの『雨』という作品も、改めてその戯曲を読み返してみると、その豊饒なる言葉の力に広い海のなかに一人投げ出されたかのような、茫然自失といった状態に晒されます。巧妙に仕掛けられた太い構造にがっしりと支えられたその物語は、両国橋から山形へと続く道を歩みながら、一つ一つ発せられる言葉の豊かな「音」を伴って、予期せぬ展開のスピードで縦横無尽に拡がっていきます。そして、自分の言葉を失った人間の物語であるその言葉の旅は、雨の一筋の線のように、死へと天から地面に直線的に叩きつけるラストシーンで終わります。まったく、一瞬たりとも気を許すことの出来ない道程なのです。

愉快に、しかも残酷に、この溢れ出る言葉の海と正面からぶつかり合うしかありません。ならば、その物語の迷宮のなかで、俳優たちと思いきり真剣に遊んでみようと思っています。

雨

井上ひさし

Inoue Hisashi

1934年生まれ。60年、上智大学卒業。放送作家として『ひょっこりひょうたん島』（共作）、小説に『手鎖心中』『吉里吉里人』『四千万歩の男』『東京セブンローズ』『イソップ株式会社』ほか、エッセイも含め、著書多数。戯曲に『日本人のへそ』『藪原検校』『小林一茶』『頭痛肩こり樋口一葉』『きらめく星座』『黙阿弥オペラ』『紙屋町さくらホテル』『夢の裂け目』『夢の泪』『夢の痂』『太鼓たたいて笛ふいて』『兄おとうと』『円生と志ん生』『箱根強羅ホテル』『ロマンス』『私はだれでしょう』『ムサシ』『組曲虐殺』まで傑作数知れず。87年、蔵書を故郷山形県川西町に寄贈し、図書館「遅筆堂文庫」が開館。同文庫を拠点に88年より「生活者大学校」を開校している。直木賞、岸田國士戯曲賞、紀伊國屋演劇賞、読売文学賞、菊池寛賞、朝日賞ほか受賞多数。



栗山民也

Kuriyama Tamiya

早稲田大学文学部演劇科卒業。主な演出作品に、『ゴドーを待ちながら』『阿国』『獅子を飼う』『GHETTO / ゲットー』『海の沸点』『エヴァ、帰りのない旅』『太鼓たたいて笛ふいて』『マリー・アントワネット』『私はだれでしょう』『ロマンス』『かもめ』『闇に咲く花』『赤い城 黒い砂』『きらめく星座』『BLACK BIRD』『炎の人』『組曲虐殺』『海をゆく者』などがある。紀伊國屋演劇賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞、芸術選奨文部大臣新人賞、毎日芸術賞第1回千田是也賞、第1回朝日舞台芸術賞などを受賞。新国立劇場では『今宵限りは……』『ブッダ』『キーン』『夜への長い旅路』『欲望という名の電車』『ピカドン・キジムナー』『夢の裂け目』『ワーニャおじさん』『櫻の園』『浮標』『夢の泪』『涙の谷、銀河の丘』『世阿彌』『胎内』『喪服の似合うエレクトラ』『箱根強羅ホテル』『母・胆っ玉とその子供たち』『夢の痂』『CLEANSKINS / きれいな肌』『氷屋来たる』『まほろば』、オペラ『夕鶴』『蝶々夫人』を演出。新国立劇場演劇前芸術監督、現在、新国立劇場演劇研修所所長。

おどくみ

小劇場

作：青木 豪

演出：宮田慶子

企画意図

シーズン掉尾を飾る唯一の新作書き下ろしを、新進気鋭の青木豪氏に委嘱、演出は芸術監督となる宮田慶子。青木氏は演劇ユニット「グリング」に所属する脚本家・演出家で、最近では外部への書き下ろしも多く、文学座、劇団 NLT、劇団新感線、俳優座などへ作品を提供しています。綿密な取材と巧みな状況設定の中から生まれる日常の中のドラマを描き、登場人物間のユーモアある会話の積み重ねにより、それぞれの葛藤や心情、人間関係を描き出す演劇ならではの作風。常に人間への温かい視線を保ちつつ、現代社会への問題提起もしなやかに行うのが特徴です。現代演劇の担い手のひとりとして、今後の活躍も大いに期待できる青木氏の新国立劇場初登場。

弁当屋の厨房における日常会話を通して、天皇とは何かを問う家庭劇。これまでの現代日本演劇の視点とは角度を変え、「となりの天皇家」といった距離感で、「そこにあるはずだが、なかなか見えにくい日本の中心とは何か」を探り、80年代以降の日本とは何かを問おうとする意欲作。

作 品

時は80年代半ば。神奈川県葉山にある商店街。そこにある弁当屋・岩尾の厨房は、毎日、仕出し弁当の注文生産に追われている。店を切り盛りするのは、岩尾家の主人・幸広ではなく、その妻・良子と、パートの主婦・酒田の二人。そこに岩尾家の長男・健介と長女・結衣子、幸広の弟で嫁の来手が無く、実家に居残ってしまった義人ら、ひとくせふたくせある人々が絡む。

ある日、その岩尾家の日常が変化を見せる。長男・健介は高校で学習院に受かり、写真部に所属したが、ひとつ上にいる宮様と親しくなり、東宮御所に招待されたというのだ。「東宮御所に行くあかつきには、是非、岩尾の弁当を持参して、宮内庁御用達にして来い！」と調子に乗る幸広。普段は父の言葉など無視する健介だったが、これには意外と乗り気になる。かくして、岩尾家の試みはなぜだかうまく行ってしまう、宮内庁から注文が入る。珍しく一丸となって仕事に精を出す岩尾家。弁当を届け万々歳なはずだったのだが、思わぬ異変が起きた。岩尾家にたちまち暗雲が立ちこめるのであったが……

作家からのメッセージ

青木 豪

—祈りに似た気持ちで

僕が生まれた横須賀という町は、中上健次さんの描く「路地」にどこか似た町でした。山と海に挟まれて平地が少なく、そこに人が ギッシリと住んでいて、肉親や兄弟の愛憎が激しくて、隣近所の噂話が絶えなくて、ときどき殺人や強盗や火事があって、決して穏やかには住んでいられない町でした。

僕の実家は、そこで弁当屋を営んでいました。自衛隊や米軍基地や、葉山の御用邸なんかに、時々仕出し弁当をおさめていました。

町内会や学校の運動会に弁当をおさめる時にも、何か間違いがあってはいけないとそれなりに緊張したものでしたが、それがアメリカさんや天皇関係となれば、その日の緊張感は並大抵のものではありませんでした。

この作品は、僕の初めての私戯曲になるはずですが、20年以上前の記憶を頼りに書く私戯曲は、おそらく自己満足に終わることはなく、それこそ中上健次さんが「路地はどこにでもある」と仰有ったように、アメリカや天皇や80年代を内包し、ある種の普遍性を持つものになるだろうと思います。日常の細部や、ささやかな声の中にこそ、僕は大きなドラマがあるのだと信じているのです。誰もが見たことがある光景なのに、誰も見たことのない芝居を作りたい。それが今の、僕の祈りにも似た気持ちです。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

青木豪氏の作品は、日常を独自の切り口で、スリリングに見せてくれます。一見、どこかに存在するような人間関係を描きながら、その裏にかくれた、毒をはらんだ個の姿や、欺瞞性に支えられたあやうい関係性を、引きずり出していきます。そして、それはまさしく、現代に生きる、足元の不確かな私達の姿と重なって、いとおしくも苦い現実を、あからさまに見せてくれるのです。青木氏自身が濃く投影されたこの書下ろし新作の世界に、思う存分浸らせて頂く覚悟でいます。

おどくみ

青木 豪

Aoki Go

劇作家、演出家。明治大学文学部文学科演劇学専攻卒業。演劇集団円・演劇研究所を卒業後、1997年に「やりたい時にやりたい人と、はずさない芝居を……」と個人で旗揚げしたユニット、劇団グリングの全公演の脚本・演出を務める。グローブ座『エデンの東』の脚色、シス・カンパニー公演『猿のゆりかご』の作・演出などで注目され、舞台版『流星ワゴン』、劇団☆新感線プロデュース『IZO』の脚本、彩の国さいたま芸術劇場の音楽劇『ガラスの仮面』脚本、俳優座プロデュース『空の定義』の脚本などがある。また劇団公演に『吸血鬼』『jam』など。最近は舞台に止まらず、NHK『中学生日記』、HTB『ミエルヒ』、映画『遠くの空に消えた』（脚本協力）など活動の場を広げている。



宮田慶子

Miyata Keiko

※ P2 を参照

PLAY

公演一覧

開場記念公演～2009/2010シーズン

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
開場記念公演	紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子	97.10/22
	[蒲田行進曲完結編] 銀ちゃんが逝く	つかこうへい		つかこうへい	97.11/13
	夜明け前	原作 島崎藤村	脚色 村山知義 補訂脚本 津上 忠	木村光一	97.12/4
	リア王	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	鶴山 仁	98.1/17
1998/ 1999	虹を渡る女	岩松 了		岩松 了	98.5/7
	幽霊はここにいる	安部公房		串田和美	98.5/12
	今宵かざりは… 1928 超巴里井主義宣言の夜	竹内統一郎		栗山民也	98.6/12
	音楽劇 ブッダ	原作 手塚治虫	脚本 佐藤 信	栗山民也	98.9/7
	THE PIT フェスティバル				
	カストリ・エレジー スタインベック 「二十日鼠と人間」より	脚本 鐘下辰男		鐘下辰男	98.10/3
	神々の国の首都	坂手洋二		坂手洋二	98.10/17
	寿歌	北村 想		北村 想	98.10/29
	ディア・ライアー すてきな嘘つき	ジェローム・キルティ	丹野郁弓	宮田慶子	98.11/4
	野望と夏草	山崎正和		西川信廣	98.12/2
	新・雨月物語	脚本 鐘下辰男		鶴山 仁	99.1/11
	子午線の祀り	木下順二	演出 観世栄夫／内山 鶴 酒井 誠／高瀬精一郎		99.2/3
	セツァンの善人	ヘルトルト・ブレヒト	松岡和子	串田和美	99.5/18
	羅生門	原作 芥川龍之介		構成・演出 渡辺和子	99.6/4
	棋人 ―チーレン―	過士行	菱沼彬晃	林兆華	99.7/1
1999/ 2000	キーン 或いは狂気と天才	J.P.サルトル 上演台本 栗山民也／江守 徹	鈴木力衛	栗山民也	99.10/4
	美しきものの伝説	宮本 研		木村光一	99.11/4
	―森本薫の世界―				
	かくて新年は	森本 薫		宮田慶子	99.12/8
	怒濤	森本 薫		マキノノゾミ	00.1/11
	華々しき一族	森本 薫		鐘下辰男	00.2/9
	新・地獄変	原作 芥川龍之介	脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	00.3/23
	なよたけ	加藤道夫		木村光一	00.4/11
	夜への長い旅路	ユージン・オニール	沼澤治	栗山民也	00.5/11
2000/ 2001	マクベス	ウィリアム・シェイクスピア	福田恒存翻訳より 潤色 鐘下辰男	鐘下辰男	00.9/8
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	00.10/2
	欲望という名の電車	テネシー・ウィリアムズ	鳴海四郎	栗山民也	00.10/20
	シリーズ 「時代と記憶」				
	memorandum メモランダム	構想・構成 ダムタイプ			00.11/27
	母たちの国へ	松田正隆		西川信廣	01.1/10
	ピカドン・キジムナー	坂手洋二		栗山民也	01.2/10
	こんにちば、母さん	永井 愛		永井 愛	01.3/12
	夢の裂け目	井上ひさし		栗山民也	01.5/8
	紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子／井上ひさし	01.4/4
	廣作・桜の森の満開の下	野田秀樹		野田秀樹	01.6/1

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2001/ 2002	海外招待作品 Vol.1 太陽劇団 堤防の上の鼓手	エレヌ・シクスー	字幕翻訳 松本伊瑳子	アリアヌ・ムヌーシュキン	01.9/7
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	01.10/29
	美女で野獣	荻野アンナ		宮田慶子	01.12/10
	シリーズ チェーホフ・魂の仕事				
	Vol.1 かもめ	アントン・チェーホフ	英訳 マイケル・フレイン 翻訳 小田島雄志	マキノノゾミ	02.1/11
	Vol.2 くしゃみ /the Sneeze	アントン・チェーホフ	台本 マイケル・フレイン 翻訳 小田島恒志	熊倉一雄	02.2/28
	Vol.3 「三人姉妹」を追放されし トウゼンバフの物語	岩松 了		岩松 了	02.4/1
	Vol.4 ワーニャおじさん 四幕の田園生活劇	アントン・チェーホフ	小野理子	栗山民也	02.5/9
	Vol.5 櫻の園	アントン・チェーホフ	潤色 堀越 真 (神西清翻訳による)	栗山民也	02.6/21
2002/ 2003	その河をこえて、五月	平田オリザ／金明和		李炳熹／平田オリザ	02.6/3
	海外招待作品 Vol.2 国際チェーホフ演劇祭 in モスクワ ハムレット	ウィリアム・シェイクスピア		ペーター・シュタイン	02.9/7
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	02.10/11
	メヤジルシ ―誘われて	太田省吾		太田省吾	02.11/12
	シリーズ 「現在へ、日本の劇」				
	①ピルグリム	鴻上尚史		鴻上尚史	03.1/14
	②浮標	三好十郎		栗山民也	03.2/19
	③マッチ売りの少女	別役 実		坂手洋二	03.4/8
	④サド侯爵夫人	三島由紀夫		鐘下辰男	03.5/26
2003/ 2004	涙の谷、銀河の丘	松田正隆		栗山民也	03.5/13
	ゴロヴリョフ家の人々	原作 サルティコフ・シチェドリン	翻訳 湯淺芳子 脚本 永井 愛	永井 愛	03.6/18
	nocturne ―月下の歩行者	構成 松本雄吉		松本雄吉	03.9/8
	夢の泪	井上ひさし		栗山民也	03.10/9
	世阿彌	山崎正和		栗山民也	03.11/27
	シリーズ 「女と男の風景」				
	①海外招待作品 Vol.3 香港・劇場組合 The Game / ザ・ゲーム	ウジェーヌ・イヨネスコの悲喜劇「椅子」より 翻案 ジム・チム／オリヴィア・ヤン	字幕 角田美知代	ジム・チム／オリヴィア・ヤン	04.2/20
	② THE OTHER SIDE ／線のむこう側	アリエル・ドーフマン	水谷八也	孫振策	04.4/12
	③てのひらのこびと	鈴江俊郎		松本祐子	04.5/11
	④請願 静かな叫び	ブライアン・クラーク	吉原豊司	木村光一	04.6/22
	こんにちは、母さん	永井 愛		永井 愛	04.3/10
	透明人間の蒸気	野田秀樹		野田秀樹	04.3/17
	ブロードウェイ・ミュージカル INTO THE WOODS	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	04.6/9

* =THE LOFT 公演

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2004/ 2005	* 胎内	三好十郎		栗山民也	04.10/4
	* ヒトノカケラ	篠原久美子		宮崎真子	04.10/22
	* 二人の女兵士の物語	坂手洋二		坂手洋二	04.11/8
	喪服の似合うエレクトラ	ユージン・オニール	沼澤洽治	栗山民也	04.11/16
	城	原作 フランツ・カフカ	構成 松本 修	松本 修	05.1/14
	シリーズ 笑い				
	①花咲く港	菊田一夫		鶴山 仁	05.3/14
	②コミュニケーションズ 現代劇作家によるコト集	作 綾田俊樹／いとうせいこう／ケラリーノ・サンドロヴィッチ／杉浦久幸 高橋徹郎／竹内 佑／鄭 義信／土田英生／別役 実／ふじきみつ彦／武藤真弓 原作使用 筒井康隆	構成・演出 渡辺えり子		05.4/8
	③箱根強羅ホテル	井上ひさし		栗山民也	05.5/19
	④うら騒ぎ ノイズ・オフ	マイケル・フレイン	小田島恒志	白井 晃	05.6/27
2005/ 2006	その河をこえて、五月	平田オリザ／金明和		李炳熹／平田オリザ	05.5/13
	海外招待作品 Vol.4 ベルリナー・アンサンブル アルトウロ・ウイの興隆	ベルトルト・ブレヒト	イヤホンガイド翻訳 新野守広	ハイナー・ミュラー	05.6/22
	* 黒いチューリップ／盲導犬	唐 十郎		中野敦之	05.9/27
	* 屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	05.10/31
	母・肝っ玉とその子供たち —三十年代戦争年代記	ベルトルト・ブレヒト	谷川道子	栗山民也	05.11/28
	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ	小田島雄志	イリーナ・ブルック	06.2/9
	十二夜	ウィリアム・シェイクスピア	脚本 山崎清介 小田島雄志翻訳による	山崎清介	06.3/7
	シリーズ 「われわれはどこへいくのか」				
	①カエル	過士行	菱沼彬晃	鶴山 仁	06.4/1
	* ②マテリアル・ママ	岩松 了		岩松 了	06.4/19
	③やわらかい服を着て	永井 愛		永井 愛	06.5/22
	④夢の痼	井上ひさし		栗山民也	06.6/28
	ブロードウェイ・ミュージカル Into the Woods	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	06.5/19
2006/ 2007	アジアの女	長塚圭史		長塚圭史	06.9/28
	『劇的な情念をめぐって』—世界の名作より—				
	シラノ・ド・ベルジュラック	原作 エドモン・ロスタン	翻訳 辰野 隆／ 鈴木信太郎	構成・演出 鈴木忠志	06.11/2
	イワーノフ／ オイディプス王	原作 アントン・チェーホフ 原作 ソフォクレス	翻訳 池田健太郎 日本語 福田恒存 ドイツ語 ヘルダーリン	構成・演出 鈴木忠志	06.11/4
	* エンジョイ	岡田利規		岡田利規	06.12/7
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	07.3/1
	CLEANSKINS／きれいな肌	シャン・カーン	小田島恒志	栗山民也	07.4/18
	下周村 —花に嵐のたえもあるさ—	平田オリザ／李六乙		李六乙／平田オリザ	07.5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	ジョン・ケアード	07.5/31
	氷屋来たる	ユージン・オニール	沼澤洽治	栗山民也	07.6/18

* =THE LOFT 公演

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2007/ 2008	「三つの悲劇」 ―ギリシャから				
	Vol.1 アルゴス坂の白い家 ―クリュタイムストラ―	川村 毅		鶴山 仁	07.9/20
	Vol.2 たとえば野に咲く花のように ―アンドロマケ―	鄭義信		鈴木裕美	07.10/17
	Vol.3 異人の唄 ―アンティゴネ―	土田世紀	脚色 鐘下辰男	鐘下辰男	07.11/14
	屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子 〈屋上庭園〉 深津篤史 〈動員挿話〉	08.2/26
	焼肉ドラゴン	鄭義信		梁 正雄／鄭義信	08.4/17
	オットーと呼ばれる日本人	木下順二		鶴山 仁	08.5/27
	シリーズ・同時代				
	Vol.1 鳥瞰図 ―ちようかんず―	早船 聡		松本祐子	08.6/11
	Vol.2 混じりあうこと、消えること	前田司郎		白井 晃	08.6/27
	Vol.3 まほろば	蓬萊竜太		栗山民也	08.7/14
2008/ 2009	近代能楽集『綾の鼓』『弱法師』	三島由紀夫		前田司郎〈綾の鼓〉 深津篤史〈弱法師〉	08.9/25
	山の巨人たち	ルイジ・ピランデルロ	翻訳 田之倉稔	ジョルジュ・ラヴォーダン	08.10/23
	舞台は夢 ―イリュージョン・コミック―	ビエール・コルネイユ	翻訳 伊藤 洋	鶴山 仁	08.12/3
	シリーズ・同時代【海外編】				
	Vol.1 昔の女	ローラント・シンメルプフェニヒ	翻訳 大塚 直	倉持 裕	09.3/12
	Vol.2 シュート・ザ・クロウ	オーウェン・マカファーティ	翻訳 浦辺千鶴／小田島恒志	田村孝裕	09.4/10
	Vol.3 タトゥー	デーア・ローアー	翻訳 三輪玲子	岡田利規	09.5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	ジョン・ケアード	09.5/29
	現代能楽集 鶴	坂手洋二		鶴山 仁	09.7/2
	ヘンリー六世・三部作	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	09.10/27
2009/ 2010	象	別役 実		深津篤史	10.3/5
	東京裁判三部作	井上ひさし		栗山民也	
	夢の裂け目				10.4
	夢の泪				10.5
	夢の痂 ^{かさ}				10.6
	エネミイ	蓬萊竜太		鈴木裕美	10.7